



景観

LANDSCAPE

KEIKAN

上越市景観形成情報誌「景観」第4号

〒943-8601 新潟県上越市木田1丁目1番3号 TEL 0255-26-5111 FAX 0255-26-6112

この情報誌は再生紙を使用しています。

景観

上越人のDNAを探る

特別企画

歩けばわかるまちなみの魅力

みちとの遭遇

講評

第7回上越市景観デザイン賞

座談会

上越青春ものがたり

私だけが知っている、とっておきの場所
ぶち景観みつけた

何代にもわたり守り育てた緑の島
鎮守の森

まちは舞台、みんなが主役 / 読者より

上越市
景観形成情報誌
2002

No.4

 上越市

特別企画

みちとの遭遇

歩けばわかる まちなみの魅力

Discovering the treasures of your town, begins with a stroll.

「みち」は、ただ移動するためのものではなく、車や、自転車や、歩いたり、ベンチに座って休んだりしたときに、移り変わる景色や四季の変化、気候を感じて楽しむことができます。また、舗装や街路樹や照明などがあり、デザインによっても様々な表情を見せてくれます。そう、道には景観があふれているのです。道を単なる移動の道具にしないで、そこに何かがあるのか見直してみませんか。今まで見落としていた何かが発見できるかも知れません。



子どもの視線だからこの発見もある。

最近の子供は道草なんてしないのかな？学校帰りの子ども達をつかまえて聞いてみた。

→道草ってしてる？

◆冬はね、雪山すべり。夏はザリガニとり。トンボとりや石ひろいも好き。光ってるつぶのに入った石がスキかな。あと、魚もとったよ。(さくらさんと葵さん)

◆もう道草なんてしないけど。いろんなこと話ながら帰ってくることはあるかな。(夕湖さん)

◆冬は男の子に雪ぶつけられたりする。でも、あてられた人がお返しにぶつけたりしてるよ。あと、5人くらいでおしゃべりしてる。学校であったこと話してるの。話が終わらないんだよ。ねえ。(千尋さん)

◆春になると、途中の畑とここでたんぼぼやくつくつんでおかあさんのおみやげにするんだ。花瓶にかざってくれるよ。(翔太郎さん)



「つくって食べられるんだって〜」

道の声

道草と発見

雁木通りの町屋、新興住宅地、田んぼの中の一本道。昼間はヒソソリしている通りでも、午後3時をまわるあたりから、学校帰りの子ども達のおしゃべりや笑い声が聞こえてくる。それまでの何気ない通りが急に元気になるひと時。平和の象徴。

毎日通っている道だけに、ちょっとした変化も発見してしまう。小石や雑草、雪のかたまり… 何でもないものが光って見える一瞬があるみたい。子供の通学路には、自然をそのまま残したり、生垣を造ったりガーデニングをしたりして、四

季の変化が楽しめるといいですね。小鳥のさえずり、蝶々にトンボなどの生き物との出会いも、毎日通ううちに心に記憶され、大人になってもいつまでも心に残る道になると思います。



かけっこよーいどん!



みちとの遭遇

What children discover on the way home.



雁木通りプラザのこのスペースは通り抜ける風が強い。その中でも「聴いて〜」の思いを込めて歌う。



「知らない誰かに聴いてもらいたい。」自分の実力を試すために、路上に出始めた。



歌う人も勇気があるが、立ち止まって聴く人も勇気がある。

彼らは人波を見ながらいったいどんなことを考えているのだろうか？どうして道で歌うのだろうか。聞いてみた。

- ◆道でやるのは、開放感がある。アスファルトの方がいい。階段がなくて、観客といっしょに平面にいるほうが空間を共有できて一体感が生まれる。(くしゃみ)
- ◆一人でも多くの人に歌を聴いてほしい。いろんな意味でカッコいいメロディーを作りたい。人間としてかっこよくなりたい。疲れたサラリーマンの歩いているところで演奏して癒したい。(エア・ドロップ)
- ◆初めてストリートに立った時、楽しかった。今よりも、楽しんでワクワクしていた。今はまわりにうまい人が出てきて、がんばらなきゃ、と思う。やらなきゃ、と思う。やりたい、ではなくって。(こころ)
- ◆ストリートでやり始めたのは、やりたくてというより練習のつもりだった。そしたら面白かった。迷惑にならないよう心がけている。スピーカーやマイクがあると歌えない。こわそうな若者が真剣に聴いてくれるのも、若い女の子たちよりなんか嬉しい。自己満足もあるけれど、人がよかったと言ってくると、歌ってよかったと思う。誰かの目にとまること、人に聴かせることが気持ちいい。(MSAW)

道の声
Voice



みち
との
運
過
——歩むのからまじりあふる力

進化する
まちなみと
人

最近、上越の路上でもたびたび見かけるようになったストリートミュージシャン。そういえば、彼らを見つける場所は高田駅前や直江津駅、雁木通りプラザなど最近街中が整備されたところが多いようです。新しく、明るくて、きれいな場所が彼らを惹き付けるのでしょうか。自分達の歌で人波を止められるか、力試しに路上に出た彼らにとって、演奏と観客と通り過ぎる人たちのための空間が

確保された広い歩道は魅力的な空間のようです。ストリートミュージシャンの活動が上越にどれだけ根付くのか、演奏時間など、周辺にお住まいの方達との折り合いも大切です。そして、彼ら若者の活動する場所を大切に使い、いつまでもきれいで明るい、若者が演奏したくなる道として維持していきたいものです。

Town and people growing together.



長岡から車を飛ばして来ているというおばさん。客の「これ、ちょっと高いねか」の突っ込みに「そやろ、高いしけ、うまいんだわね。はははー」と返していた。



11月の祝日の風景。まるでお祭りのように人が押し寄せていた。



市に出て四代目となる諏訪さん。17歳の娘さんも手伝い、後継者の心配がないのはうれしい。



いつもの表情に戻った道。アスファルトと周りの家に視線が行く。

道の声

既に道の一部になっている人に聞いてみた。
一朝市ってどうですか？

- ◆コミュニケーションを取りながらの商売は市の特徴であり、スーパーに対抗できるといえます。今の路上で商売をする形式がベストなので、市がこれからも続いてほしい。(諏訪さんと娘さん)
- ◆三八の市は活気があり、毎回来ても何か収穫があって楽しいです。町の活性化につながればいいですね。(渡辺さん)
- ◆市に来るようになって50年。作ることで売ることが楽しくて楽しくてしかたない。市が楽しみ。(渡部さん)
- ◆旅行雑誌で見つけたので来てみました。思ったよりたくさんのお店があってびっくり！(埼玉から来られた川浪さんとご家族)

表情が 変わる道 朝市

上越では現在、3つの大きな朝市が開かれています。高田の三七・四九の市と直江津の三八の市。

色とりどりのパラソル、地元で取れた様々な野菜や花、そして、何よりもそこに集う人の表情がストリートを一変させ、普段とはまるで別の通りになります。

上越の朝市も高齢化や出店数の減少という問題に直面している一方で、市ならではの品揃えや売り手と買い手のコミュニケーションの豊かさから根強いファンも大勢います。

朝市が開催される通りでは、交通止め

のために、あらかじめ車を移動させるなどのご協力をいただいています。また、トイレやゴミなどの人が集まるゆえの問題も抱えています。いつまでも賑わいを続けるためには、ほい捨てはしない、車は決められた場所に駐車するなどのルールを守り、みんなが協力することが大切だと感じました。

「みち」の魅力はそこに暮らす人びとの魅力のようです。路上が魅力的になるよう、みんなで協力していきたいものですね。

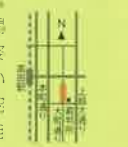
上越朝市の歴史

上越の3つの大きな朝市はその発生が異なり、開催場所にも変遷があります。

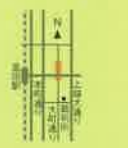
三・八の市 明治44年に新橋区の青年会により始められました。当時は5と9の付く日に開催されましたが、翌年から3と8のつく日になりました。現在では海に近くこの通り自体が「三・八通り」と呼ばれて親しまれています。



二・七の市 高田に入城した第13師団の要望により、明治43年に現在の本町2丁目で開催されたのが始まりです。市民の利用はもちろん、軍の関係者が大量に商品を買込む姿も当時は目立ったといわれています。交通量の増加のため、昭和35年から現在の大町3丁目に移転しました。



四・九の市 大正9年に現在の仲町2丁目付近の町内有志が空き地で町の活性化のために始めました。一時消滅したものの、大正13年の夏に大町通りの四の辻を中心に復活。大町通りに建てられた記念碑が今も残っています。



みちの道通 歩むにみるまちの魅力

Market day. It's a whole new world.

おとなの道草

歩けばわかるまちなみの魅力

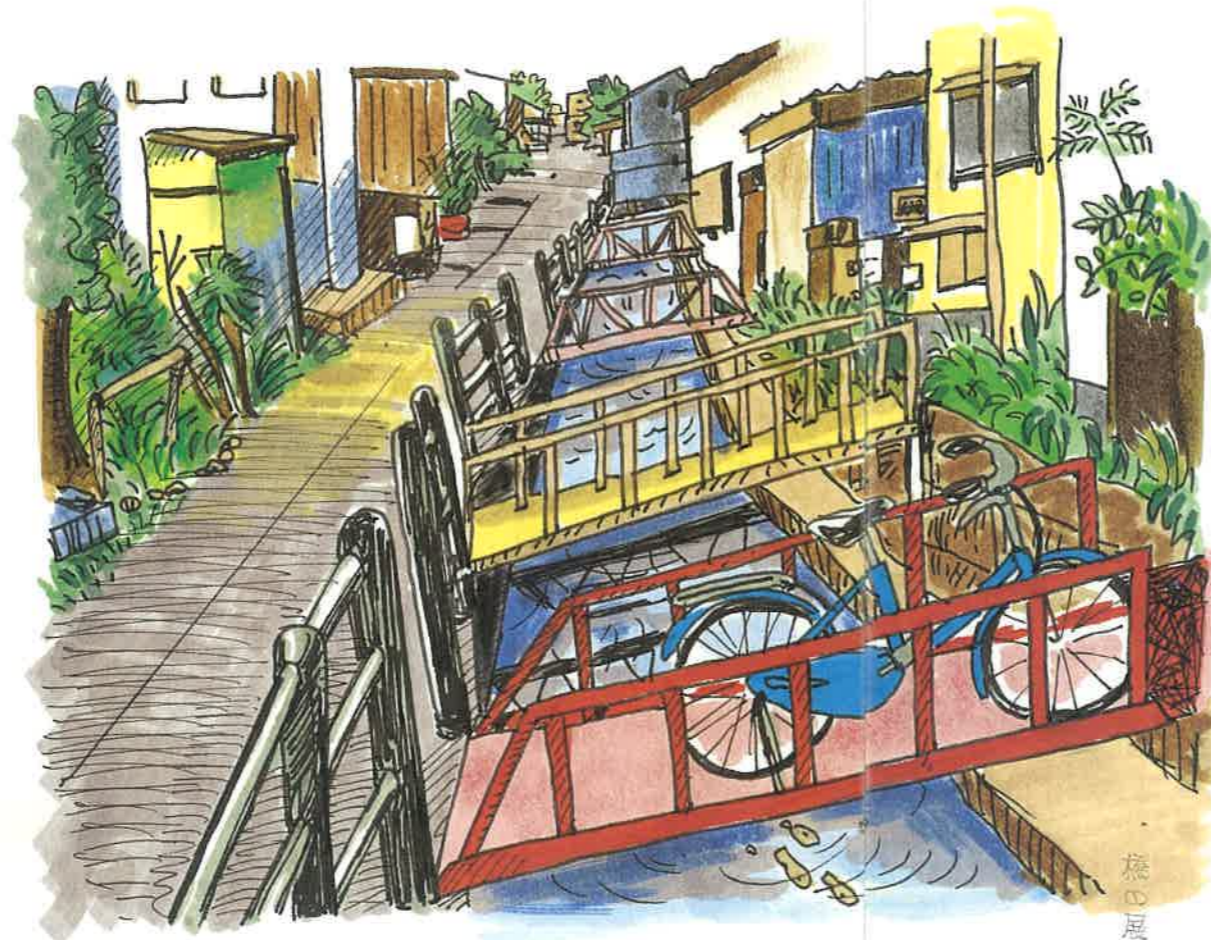
ほとんどの人が、毎日何らかのかかわりをもつ道。いつもの道も、時には足を止めてそこに何があるか、眺めてみませんか？きつとたくさんまちの魅力が発見できます。

特集の最後は、大人になっても遊び心を忘れない編集委員からの「道歩き」の提案です。

文/佐藤和夫 イラスト/樋口喜美代



NTTの塔が海カ！
このあたりもボラが潮ってくる。



桜の展(不)会



せまの道で自転車で
疾走するおじさん。

ヨコミチのススメ

「横道する」とは、わき道にそれることをいいます。回り道とは違って、多分に「道草」の要素を含んでいるのが特徴です。——と、理屈っぽくいわなくても、誰でもやっつることだと思います。

私は、酒席付きの会合などでは早めに

出て、できるだけバスに乗って、途中下車して歩くことにしています。日ごろ車窓から見る景色とは違うまちの表情や、すれ違う人たちの息づかいを感じられ、ちょっとした旅気分です。

「その角を曲がれば旅の始まり」という言葉がありますが、旅気分はその角を曲がるのが「横道」です。

© o l u m n



道をつくる

雪の日の朝、子ども達のために、自主的に除雪を行っている方がいると聞き、本町7丁目の交差点に行ってみました。

雪が降ると除雪車が道路わきに雪の塊を残していくよね。交差点では、子供達が雪の山を乗り越えられず、少し離れた所で車道を渡っていて危険だったので、雪山の除雪を始めたんだよ。そうしていると子供達が、「おじさん、ありがとう。」とちゃんと挨拶してくる。いい子

たちだね。こっちも「しっかりやってこいよ。」なんて応えたりして、張り合いもあるね。(本町七 小川さん)
◆ゴム引きのカップにスゲ笠という正統な除雪スタイルでお元気そうな笑顔に、世代を越えても通じ合う雪道の思いやりを感じました。

「断崖が行き届いた(?)木。



よりみちしたい カフェテラス

文/せきゆうこ

春のまぶしい光、初夏の空気、紅葉に山並みが映える頃、初雪のときめき、ちょっと時間のある休日。いつもの道、いつもの景色、でも、「急がなくていい時間」があると、こころの中をずっと風が通って、何かを受け入れられる隙間がうまれる。

「歩く楽しみの中に、ひと時のコーヒーブレイク。そんな気楽な喫茶店が少ないなあ。」と思っていた。高田公園に小林古径邸が公開されて、散策中に熱いコーヒーで一休みしたい。都会では排気ガスと雑踏の中でお洒落なオープンカフェが人気。まあ、それはそれで都会の魅力。ここなら、緑があって山が見えるし騒々しくもない。居心地のいい爽やかな空気の中に身をおいて、ちょっとした会話も自然に生まれてくる。そんな雰囲気味わいたい。



公園の西堀橋のそばに瀟洒な看板を見かけてご存知の方も多いでしょう。上越出身のご主人が5年前から始めたお店で、明るい窓から公園の緑を一望。お花見や運まつりの時期はもちろん、普段でも遠方からのお客様がゆっくりとくつろいでいかれるということです。

青田川の知道橋のたもとには、ジャズのBGMが流れるカフェ。初めて入ったのに、何度も来たことがあるような気持になります。川沿いの桜並木も高田公園におとらず素晴らしいもの。

身のまわりに小さな出会いや発見が積み重なって、まちの素顔の魅力が浮かび上がってくるようです。



みちとの遭遇

歩けばわかるまちなみの魅力

湖るボラは青目ボラといわれています。

それはおいて、この通りは家々の裏口から天王川に、さながら橋の展示会場のよう橋が架けられ、最近ではガーデニングもされていますので、それを一つ一つ眺めながら行くのもけっこう面白いものです。天気さえよければ、買い物の人、自転車乗りのおじさん、犬の散歩の人が狭い道を行き交い、そして頭上に伸びてきた木には、木にも歩行者にも配慮した注意喚起の標識(?)が縛りつけてあ

たり、私のような通りすがりの者にまで会釈してくれたり、裏通りですから少し雑然とはしていますが、その分、普段着の付き合いがあるようです。

ここを歩いて駅前通りに出ると、大袈裟なようですが別のまちに出たようです。

横道、道草を子どもたちだけの特権にしておかないで、大人の横道(?)をしてみませんか？大人の目が忘れてしまった発見があるはずですよ。

「横道」は旅気分です。

第7回 上越市 景観デザイン賞

THE 7th LANDSCAPE DESIGN AWARDS



雁木部門

雁木部門
景観大賞

小川呉服店

所在地/本町7-3-22

推薦者/鈴木豪太、山崎明彦、西村祥子

所有者/小川善司

交差点の角に立つと、いつも気になる呉服屋さんの店先です。伝統的な高田の雁木の味を生かしながら、家屋の内部にまで町屋の造りを踏襲して、手を抜かないこだわりを感じさせます。気さくなご夫婦の対応にも、この建物への深い愛着が感じられ、お客さんにもその気持ちが伝わっていくようです。



直江津の妻入り雁木

雁木部門
景観賞

所在地/中央5-3-7

推薦者/長谷川勲 所有者/青山松衛

上越には珍しい妻入りの母屋につながる雁木です。塩焼瓦の色合いと石畳による落ち着いた風情は、一層味わいを深くしています。



高野醤油味噌店

雁木部門
景観賞

所在地/北本町1-3-18

推薦者/池田憲夫 所有者/高野幸三

店の小さな灯りの中で、味噌醤油を手作りしている長い伝統を感じるひとこま。雁木が人々の暮らしに溶け込んだ風景といえます。



今井染呉服店

雁木部門
景観賞

所在地/大町5-5-7

推薦者/佐藤真司、田崎秀尚、関 隆三、井中幸誉、山田良一、井上かおる、田村美紗

所有者/今井孝治

朝市の楽しい風景の中で、このどっしりとした重みは格別です。古い町屋を維持し使っていくという努力には深く敬意を表します。



飯長たばこ店

雁木部門
景観賞

所在地/北本町1-5-5

推薦者・所有者/飯長 進

寺町や北本町に続く古いまち並みの中に、この新しいお宅もしっかりと馴染んでいて、雁木通りの住宅の新しいモデルといえます。

大町小学校・大手町小学校

特別賞

大町小学校と大手町小学校は、今回の景観デザイン賞において良好な景観の発見に一丸となって取り組まれました。応募された景観には、対象を見詰める視点や感じ方、その表現の仕方にもそれぞれの感性が現れているようです。これからも自分たちのまちを歩きながら、まちの歴史や生活に気付き、まちの面白さを見つけていってください。

景観デザイン賞審査委員

- 荒川 毅 JCV上越ケーブルビジョン記者「岩魚仙人」というビデオを製作。世界的な賞を受けた。
- 清水 恵一 (株)清水組 代表取締役社長 文化財ネットワーク21会員
- 関 由有子 せきゆうこ設計室代表
- 筑波 進 市美術・デザイン専門員
- 保坂 桂子 (株)地域創造研究所 研究員
- 渡辺 登子 上越教育大学大学院生春日小学校教員

一般部門
景観大賞

あづま湯

所在地/中央5-4-3

推薦者/清水謙一 所有者/滝田暁一

人情味あふれるまちのお風呂屋さんにおける日常のひとつです。明治43年の開業以来、建物に大きな手を加えない頑固なまでの5代目夫婦の生きる姿に感銘を受けました。3間間口、造り込み式雁木の上の部分は、風呂上がりの休憩場所にも使われていたそうです。馴染みの客の語らいの場として親しまれ続ける「銭湯あづま湯」は、どこか懐かしさを感じます。



岩の原葡萄園の石蔵

一般部門
景観賞

所在地/北方

推薦者/近藤明日香 所有者/萩原健一

日本のワインづくりを志し、葡萄園を育ててきた川上善兵衛と彼を支えた人々の苦労がこの重厚な石蔵の横顔に浮かんできます。



雁木のガーデニング

一般部門
景観賞

所在地/大町3-1-10

推薦者・所有者/新保祥子

住宅街の雁木で住人の心遣いを感じる花々や緑を目にすると心が和みます。1軒の心遣いが近隣にも広がっていくように祈ります。

くわどり湯ったり村のブナ林

一般部門
景観賞

所在地/皆口

推薦者/林 勇

残雪に覆われたブナ林も、やがて花が咲き青葉が涼しい木陰をつくり、楽しい散策道となります。いつまでも残したい景観です。

風力発電と妙高連峰

一般部門
景観賞

所在地/直江津沿岸壁東ふ頭緑地帯

推薦者/野本一栄、本名正幸

自然が与えてくれた雄大な山並みの美しさと、人工的で流通産業の拠点である直江津港や風力発電との取り合わせが面白い景観です。



ここ、上越で人生の春、青春時代を過ごす若者たちがいる。

若者にとって、上越とはどんなまちなのか？

県外からやってきた大学生、短大生、そして地元っ子の高校生に思いのたけを語ってもらいました。

——県外からこちらに来られた方にまずお聞きしますが、どうして上越に来ようと思ったのですか？

見田 私は愛知県から、雪にアコがれてこちらに来たんです。ボードをやっているの、スキー場に近いうところへ来たかったんです。雪、思ったよりずっとすごかったです。びっくりしました。今は楽しんでます。

川上 僕は長野の小布施から来ました。3年と数ヶ月上越に住んでいるんですが、去年の春から車に乗るようになりました。初めて車のある冬を迎えるんです。掘り起こすのが、今からもういやですね。

山下 神奈川から来ました。雪がすごいというのが上越のイメージとしてありました。小学校の教科書に、上越の写真が出ていて、2階から出入りしている写真のイメージが強かったです。(笑)

磯田 奈良から来ました。私はまだここで冬を越したことがないので、どうなるのか先行きが不安で

す。車もないし…。自転車で買い物に行っているんですが、雪が降ったらどうしようと思います。うわさでは、自転車のタイヤに縄を巻くと走れるって聞いたんですが…。(全員爆笑)

——上越に来る前には、どんなところだというイメージがあったんですか？

見田 雪！

山下 雪と米と酒です。いなか…？

川上 子供の頃はけっこう長野からこちらの海に来ていたのでなじみがありました。なつかしい感じ。住んでみて、思ったより田舎だったと思いましたが、これくらいがちょうどいいかも。でもカラスが多すぎるのがちょっと。フン公害がひどいです。

——ところで普段、みなさんはどこに遊びに行きますか？

川上 仲間内で温泉に行くことが多いですね。湯ったり村とか、名立とか。

見田 車を持ってから、ドライブに行

くようになりました。ここは季節がはっきりしているので季節を楽しめます。季節のスポーツも。

山下 私も温泉に行きます。

見田 でも車がないと、どこにも行けませんよね。

——そうですね。あるとないとは行動範囲が全然違うと感

じます。車にはまだ乗れない、高校生の方たちはどうですか？

田中 バイクがあるので、バイクで海とか行きます。寒いともう…。(笑)あと、友達の家とかウイングとかジャスコとか。服を買うのは新潟市とか長野です。(衣料品は新潟市や長野、あるいは実家に帰って買うという意見がほとんどでした)



日本海の夕日 (直江津海岸)



雁木のまちなみ

見田嘉代美 (22歳) 新潟県立看護短期大学

茨木麻紀 (17歳) 高田商業高校

山下りか (26歳) 新潟県立看護短期大学



情報発信基地「雁木通りプラザ」

道は変わりますが上越で、ほーっと、リラックスできる場所はありますか？

見田 近くに高田公園があるので、ごはん持って行って食べてます。

川上 前はよく本町通りをぶらぶらして、いろんなお店に入りましたが、今は減ったかな？

磯田 ストレスが溜まった時は友人の車で海へ行って、車の中から海を見ていました。発散させる場所があまりないように思います。あ、金谷山のボブスレーは楽しい。

山下 公園で桜やはすを見るのが好きです。それから上越の食べ物はおいしいと思います。

田中・茨木 家かなあ。みんなで家で遊んでます。

——上越の景観については、どう思いますか？お気に入りの景観はありますか？

山下 田んぼ



川上 将 (23歳) 上越教育大学

田中麻衣子 (17歳) 高田商業高校

す。

見田 山ですね。妙高が白くなると「あー来る!!」と思います。

川上 僕の育った長野はまわりが必ず山なので、上越の開け具合にびっくりしました。

磯田 看板で、すごく古いのが残っているのが、いいなと思います。いつまでも残ってるっていいな。金魚、なんて書いてあるのが。それから、上越の海が好きです。夏、花火をしに行くと、楽しかったです。

田中 学校の横のパン屋さんの裏にある土手が好き。

茨木 雁木通りプラザ、いいと思った。ちょっと都会っぽかった。雁木のあるまち並みは好きです。

——上越の人については、どうですか？

見田 知らないおばちゃんから、おはよう、って言われたり、道で話したりします。隣の人が除雪機を持っていて、私のところまで雪かきやってくれたり…。親切だなと思います。あと、雪道歩くと、向かいから来た人がよけてくれたり…。さりげない優しさがとてもいいと思います。

山下 私も、車で雪にはまった時、近所の人たちが助けてくれました。

磯田 こちらに来てから、人間の

面が嫌な目に遭ったことがないんです。道を聞いても皆さん親切に答えてくれるし。ある観光地だと、物を買わない人には道を教えません、って張り紙してあるところもあるのに。いい人たちだなー、と思います。

田中 でも、高校生はいやな思いすることもあります。お店に入ると、高校生だからって、

すごく見られる。万引きを高校生がみんなするもの、って思われるみたい。

茨木 うんうん、あるよね。本当、見られるんです。長野の人の方が優しいと思った。

——そうですか。高校生の万引き、それほど多いのでしょうか？最後に、上越市に暮らすのはなんですか？

磯田 交通の便がもうちょっとよかったらいいな、と思います。

山下 そうですね。バスや電車の本数が多いといいなあ。

座談会を終えて… 今回の座談会を通じて、若者たちの上越での好きな情報は奇抜で面白いものよりも、むしろ上越らしい自然や古いまち並みを上げていた、と思いました。古いものを残しつつ、新しいまち並みを私たちが考えなければならないのではないのでしょうか？

※出席者の在籍校、年齢は平成14年3月現在のものです。

若者の表情の向こうに上越のまち並みがみえる

上越青春ものがたり

STORIES OF JOETSU YOUTH.

sign

プチ景觀 みつけた!

まち中には看板や目印など、人に情報を伝えたり誘導したりするための「サイン」がたくさんあります。それ自体を景觀とは言い難いのですが、まちなみの雰囲気を壊しも、引き立てるもする大切な小道具です。今回はそんな看板を中心に「ちょっと気になる」プチ景觀を集めてみました。見つけた人のこだわりも見え隠れします。



Petite ツバメもびっくり!

雁木にそろばんがあるなんて、びっくりしました。雁木もそろばんもすぐ昔っばい。ツバメもびっくりするんじゃないかな?



Petite ちょっと寄っていきないう

地方都市を訪ね、方言を耳にすると一挙に旅気分が高まる。方言はあたたかく、率直で人においがする。このなおえつ茶屋の看板も、人を誘う。難しい経済用語を知っているより、地元の方のひとつでもしゃべられる方が、素敵に思うこの頃である。



Petite 時を駆ける求人

店先の外壁に溶け込むように貼られた求人広告。赤くかすれた「急募」の文字に、このまちの時間への寛容さが表れている。見過ごしてしまいそうな看板だが、見つけるとくぎづけになるのもこの味わいからか。



Petite ヤンモ?

最初、何のお店なのかさっぱりわからなかった。しばらく眺めてやっと「紋屋」だと分かった。右から書かれる昔の看板も、3文字だとなぜぞっぽくて意外に面白い。



私だけが知っている、とっておきの場所!

Petite Landscape in Joetsu

Petite 風にゆれる看板

子どもの頃、学校の行き帰り、この村山そうそく屋さんの前を通ると、土間に赤や緑色に色付けされた太いろうそくがいっばいに並べられ、ぶーんとうろうそくの匂いがした。今もその看板が雁木に吊されているのは懐かしい。



Petite 上真砂(小屋の壁)

ふと気がつく小屋はコラージュ状態。古びてくると、看板も風景の一部になる?



Petite パンダ保育園

私の卒園した保育園。昔からなぜかパンダの看板である。けっしてパンダを飼っているのでもないがパンダなのだ。送迎バスもパンダバスであり、まさにパンダ保育園である。



Petite 海を感じる時

国道18号を高田方面から直江津方面に向かい、鴨島ICのすぐ近くにこの看板はある。長野方面からの海水浴客を意識しているのか、海が見えなくても海を感じる。そのまま海に連れて行ってくれるようだ。海も山も近く、恵まれた上越の自然をふと思い出させる看板である。



Petite 収穫を夢見て

2月、山麓線沿いすぐ脇の雪原にぽつんと立っていた「ふれあい農園」の看板。吹雪の中で見るとグリーンシーズンの暖かな陽射しをなぜかイメージしてしまう。今年も豊作でありますように。



Petite わき見に注意!

事故がとても多い場所なのだろう。赤地に黄色の文字、等間隔で一文字ずつ置かれた交通標識だ。雪のホワイトに映えてとてもPOP! 目立つのでわき見運転注意!



活動リポート



児童によるサイン計画 看板提案までの取組み

心の輪
を広げよう

古城小学校



直江津港に近い風力発電所1号機の近く、公園の入り口に日本語・英語・ロシア語で標記された案内看板がある。この看板は、今年古城小学校を卒業した子供たち10人が提案し、設置されたものである。ロシア人船員との交流から生まれた「自分たちのまちをより良くしたい」という気持ちがこの看板に込められている。

3年前、当時4年生だった古城小学校の子ども達は、校区に直江津港があることから港とつながりを持つ国々の人たちについて様々な調査と交流を行った。5年生では更に「自分達が外国についたら、港町はどんなふうだろう」という視点からまちを再探検。地域の人たちへのアンケート調査から外国人船員に対し必ずしも友好的なばかりでは無いことが分かった。そのような中で、よい関係を築くために、まず、自分達ができることを行うことにした。直江津港に降り立つ外国人の半分がロシア人であることを知り、対象をロシアにしぼって、あいさつカードを作成し地域に配ったり、ロシア船に乗船するなど様々な活動を行った。看板の提案もその活動の一つである。

船内見学の際、ロシア船員から「看板があると便利」「国際電話、トイレ、郵便局、銀行、

バス乗り場、店などがわかるとうれしい」と聞いた子供たちは、日本語、英語、ロシア語の3ヶ国語からなる案内看板の計画書を作成、市に提案した。その後、数回のデザイン検討を経て、案内看板は昨年11月に無事完成。出来上がりについては、子供たちも大満足している。実際、直江津港に降り立つロシア人船員の皆さんにも喜ばれているそうだ。この看板は、これからもずっと直江津港に来る船員の皆さんに役立ち、子ども達がこの活動を通じて培った「地域をよりよくしよう」という気持ちを伝え続けるだろう。



ロシア人との交流の一環、本場ボルシチの作り方を教わる。ロシア船員からの希望に基づき、児童達自らデザイン案を考えた。



「緑の島」に集うもの

鎮守の森、緑の島

春日山などの上越市周辺の山々から頸城平野を見下ろすと森や林が点在し、それをつなぐように緑の帯を見ることができます。

集落や鎮守の森、街道や川のふちに植えられた木々が島のように見えるのです。それはまるで頸城平野に浮かんだ島のようなです。この「緑の島」は、風雨の被害や河川の氾濫を受けず、またおいしい飲み水を得られることから、人々が何代にもわたって住み、緑を守り育ててきました。また「緑の島」は、空気の浄化や冬の吹雪から道路確保の役割もしてくれています。



春日山山頂から望む高田平野の「緑の島々」

古来、人は高い山に神がすむと考え、日常の信仰場所である神社に、神が山にあるときと同じように木々を植えたといわれています。また、防風などの目的のため、屋敷や街道の周りに木を植えました。それらが、平野における「緑の島」を形成してきました。現在、これらの緑は伐採され、狭められています。地域の歴史を刻む「緑の島」の役割と再生の可能性について、上越教育大学の 大悟法滋先生にお聞きしました。

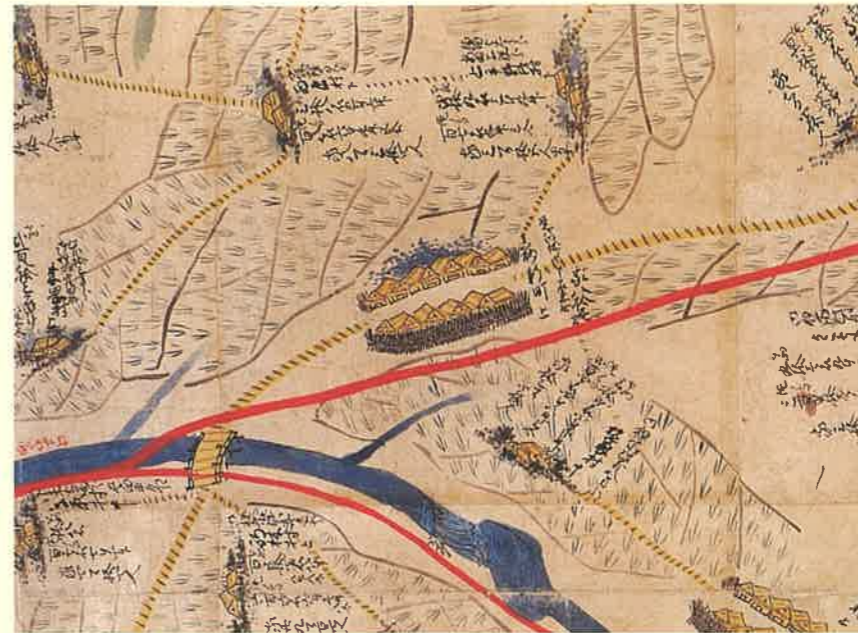
動物が集う場所

鳥や昆虫はいつまでも自由に空を飛び続けるわけではありません。やはり休息所が必要です。その休息所が「緑の島」なのです。そこは餌場でもあり、また、植物の種が運ばれたり、受粉が行われて新しい環境が生まれ、新たな動物の訪れをもたらします。ウサギやタスキなどの小動物もこの島を渡って、山から野へ、野から山へと移動します

最近、このような小動物の死骸を道路で見かけることが多くなったのは、道路の整備で移動が大変難しくなったことと、都市化によって「緑の島」が減少し、移動距離を長くしたことが原因の一つといえます。

人々が集う場所

「緑の島」のひとつに、鎮守の森があります。そこには、日本の古来の自然の神を祭る祠があったり、お地蔵さんがあったりします。ご神木といわれる大木や珍しい木が奉納されて植えられています。そこで行われる祭りは、大人から子



慶長2年(1597)、上杉景勝が描かせた「越後国絵図」を見ると、集落名や屋敷林が細かく描かれていて、それらは400年後の今も美しい「緑の島」の景観として生きている。(越後国頸城郡絵図(部分) 米沢市「上杉博物館」所蔵)

どもまで集って地域の交流が行われ、人々の絆が生まれる集会所の役割もしてくれます。

都会のオフィス街で昼休みになると、みんな緑の多い公園に出て、食事をしたり談笑している姿をよく見かけますが、これは緑が人びとに安らぎをもたらしてくれる力を持っているからなのです。

守り育てる

上越市周辺は緑が多く、今まであまり「緑の島」について意識されることはありませんでしたが、都市化が進む中で今からでも守り育てていく必要があります。

宅地造成されて、その中に公園が作られますが、そこには記念樹だけが一本、ぽつんと植えられている光景を見かけます。

上越のような気候風土では、一本の木だけでは育ちにくいので、木々を集団で寄り添うようにして植え、木々がお互いに励ましあって育つようにしなければなりません。

遊具ばかりの公園ではなく、これらが育って「緑の島」になってくれることを期待したいのですが、森になるには時間と維持が大変です。これらを地域の人たちの手で、地域の新しい鎮守の森にしていくことができれば、新たな自然と人との共存への道になるかもしれません。

「緑の島」は上越らしい景観のひとつ

最近ほとんど、はさ木が見られなくなりましたが、よそから来た人たちは、田んぼの畦に並ぶはさ木や平野の中に点在する「緑の島」はとてもすばらしい景観だと言います。もし、それを眺めて「安らぎ」を得られ、いいまちだという印象を持ってもらえるなら、それは、私たちにもやはり、いい景観なんです。ですから、これらを大切に守るだけではなく、みんなで育てていかなくてはならないと思います。



大悟法 滋
上越教育大学教授
(自然系理科) /
上越教育大学附属
幼稚園園長 / 理学
博士

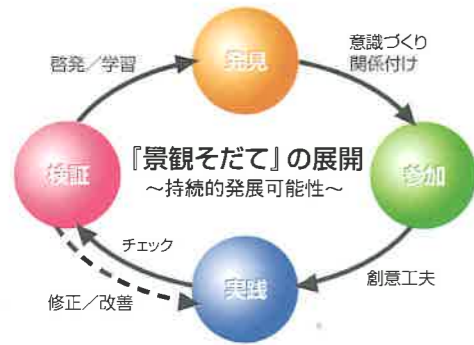
まちは舞台! みんなが主役!

Our town is a stage! We all have a major role!



あなたの発見と参加が
まちづくりにつながります。

上越市景観形成基本計画
「市民が発見し育てる美しいまち」



景観という言葉を知ると、何か、風光明媚な特別な場所を連想しがちですが、実際は、海、山並み、森林などの自然、建築物やまち並みなど、私たち一人ひとりの周りに広がる日常環境の眺めが「景観」なのです。

そして私達が日常目にする景観の大部分は、毎日の生活や活動の積み重ねによりつくり出されています。

景観形成において私たち一人ひとりが、ゴミを捨てないというような日頃のマナーはもとより、周りの様子に気をとめたり、周辺のまちなみに配慮した住宅造りや地域のまちづくりを話し合うなどの取り組みが求められます。



景観フォーラム「テーマは"色彩"」
「公共の色彩を考える会」のメンバーを招き開かれた景観フォーラム。事前に市内のまち並みをウォッチングし、フォーラムの中で発表した。

景観行政あれこれ

景観アドバイザー
体育館の屋根の塗り替え時に、
周辺の環境と建物の色が調和する
ようアドバイスをいただいた。



公共サイン改善ワーキンググループ
話し合われたデザインを参考に作成された看板。わかりやすさとまち並みの調和がポイント。

雁木ウォッチング
上越の代表的なまち並み景観、雁木の説明をうける参加者。小学生の参加者もいた。

＜景観形成にむけた市の取り組み＞

市内の景観をよりよくする為の第一歩は景観の発見、次の一步はそれを話し合うこと。平成13年度に行った事業から、市民一人ひとりの景観の発見と話せる場づくりの取り組みの一部を紹介します。

- 景観デザイン賞 (詳細は10・11頁)
毎年恒例の景観デザイン賞を実施しました。平成14年度もたくさんのご応募をお待ちしています。
- 座談会「上越の色彩を考える」
(平成13年12月6日)
景観フォーラム「テーマは"色彩"」での問題提起を受け、更なる議論を深めていくために、新潟県建築士会上越支部青年部と共催で企画

しました。建築物の色彩誘導のあり方や事業者と行政の役割分担について活発な意見交換がされました。

■景観セミナー (平成14年2月・3月)
平成12年度に引き続き、市、国、県の公共事業の実施や、公共施設施設の管理に関わる職員を対象に景観セミナーを開催しました。色彩、サイン、照明について基礎的な知識を学びました。

From Readers

最近、家の周りに木や花を植えてガーデニングを楽しんでいらっしゃる方を見かけるようになりました。お庭の様子が道路からもうかがえ、まちなかにもいりどりがこぼれてきます。ご自身でガーデニングを楽しんでいらっしゃるおひとり、鴨島の小川さんにお話を伺いました。

暮らしを豊かに… わがまちを想う
鴨島：小川恵子



こちらに来てから始めたガーデニングですが、今では遠くの方と珍しい花の種を交換したりして、一年中花が絶えることはないですね。私自身は、きちんとつくり込んだ庭よりも草花が自然の状態で育つ環境作りを心掛けています。そういった意味でも、土の無いまち並みには、とても危機感を感じます。昨年などは、歩道ブロックに挟まれていた花があまりに不憫だったので、みんなで移植してあげました。歩道を作る人には、機能性だけでなくそういった小さな配慮も望みます。よく夫婦で、蔓を探しに山に入りますが蔓一つでもむやみに採ってはいけません。次の年にちゃんと元通りになるよう、人間が気遣ってあげないと…。そういった事は、自然の中に入って初めてわかる事ですね。昨年、市の「花いっぱいコンクール」で賞を頂きましたが、まちの活性化には日頃から道と庭の境をつくらない習慣が

大切だと感じます。私自身も陶芸の個展も兼ねて、昨年は庭を解放して皆さんにバラを見ていただきました。それも全て周囲のお宅のご理解があつてのこと。そういう気持ちのあらわれが地域の景観となっていくのではないのでしょうか。

花を植えて育てることを楽しむ一方、周りの住宅の方々とのコミュニケーションの場を提供し、景観の整備にも役立つ…。

ガーデニングはもちろんそれ以外でも、小川さんのような身近な取組みが第一歩になり、上越市内全体の景観がみんなの話し合いと行動によって良くなっていけば素晴らしいですね。

皆さんも得意なことから始めてみませんか？その輪が広がっていけば、景観づくりにつながりますね。

読者からの お便り

景観第3号にたくさんのご感想をお寄せいただき、ありがとうございました。一部ご紹介いたします。

MAIL 雁木は上越市の遺産であり、特集は大変良かったと思います。雁木は連続しているところに意味があると思いますが、最近の市街をみると、これが壊されているように思います。車社会の影響も多分にあると思いますが、景観を考えれば是非再考すべきであると思います。後世に残していくためにも、市民が知恵を出しあって考える必要があると思います。(匿名)

あると思います。近年、高田のまち並みを歩いてみて、緑が少ないことが気になります。雁木と豊かな緑が一体となったら素晴らしいですね。(横浜市保土ヶ谷区：畑 達子)

MAIL はじめてでしたのでとてもよかったです。各場所のよい所、意外な所、知らなかった所、又、内容など…写真ハガキはいいですね。遠方に親戚がいるので、上越市の様子などハガキを出すことで、より親近感が増します。(昭和町2：岡田照子)

MAIL 美しいパンフレットでした。むかし雁木の町に住んでいたものとして、今の住人はどう考えているか知ることができました。高田(上越市)の景観を考えるまちづくりと言われれば、やはり歴史的に雁木をなくして考えられないと思います。今、全国的に旧まち並みを尊重傾向があります。旅行しても、その歴史と結びついたまちづくりはどうなっているか視点がゆき、興味が広がります。この旧まち並みを守りながらも、現代の住みやすさを考えた方策がきつと

MAIL 子供が学校より持って帰りましたこの本を開いていると、わが子(長男)がコメントしているではありませんか。驚きました。行政が発行するものは、どことなく堅いものですが、そのようなことなく、すばらしい雑誌で読んでしまいました。一つのテーマ「景観」をとおして、色々な活動を紹介されている雑誌だと思ひ、今後も期待します。(愛媛県喜多郡内子町：井上淳一)

編集後記

景観情報誌第3号は大変好評で多くの読者の方からたくさんのご感想をいただきました。編集委員一同、張り切って第4号も取材・編集にあたりました。

今回テーマに道を選んだのは、編集委員自身の道の発見の喜びを、読者の皆様にも伝えたいという思いがあったからです。

住む人が愛着を持っている土地は何かしら美しいものです。上越市全体がそうになりたいものだと思います。

表紙写真/五智・十念寺西側の坂道。ここは、路上から屋根を見下ろすことのできる市内でも数少ないポイント。配達途中の郵便屋さんとお出逢いした。
裏表紙写真/中央・林覚寺脇の道。ひいおばあちゃんと散歩。

編集委員/魚家明子(詩人)
太田均(デザイナー/本誌アートディレクター)
川合将也(上越市地球環境大使)
佐藤和夫(出版業)
せきゆうこ(建築家)
樋口喜美代(イラストレーター)
宮崎朋子(カラーコーディネーター)
横山郁代(まちづくりファシリテーター)
渡部智子(映像・広告会社勤務)

発行/上越市都市整備部都市計画課